

観音石仏

光明寺の観音さん

日永地区・泊山崎町

元禄3年(1690)に菱川師宣が描いた『東海道分間絵図』を見ると、泊のところで「くわんおん」と称し、光明寺のあるのがわかる。

光明寺は、行基の開基で、本尊の聖観世音菩薩は弘法大師の一刀三礼の作であるといわれている。

永延2年(988)に花山法皇が、西国三十三所の観音霊場を巡り、最後の谷汲寺から京に帰られる際、光明寺に寄って一夜を過ごし、ご本尊を拝まれて

「御仏のめぐみも深き伊勢の海 まいるかいあるのりのうてなに」

とお詠みになり、聖観世音菩薩の御前に捧げられた。

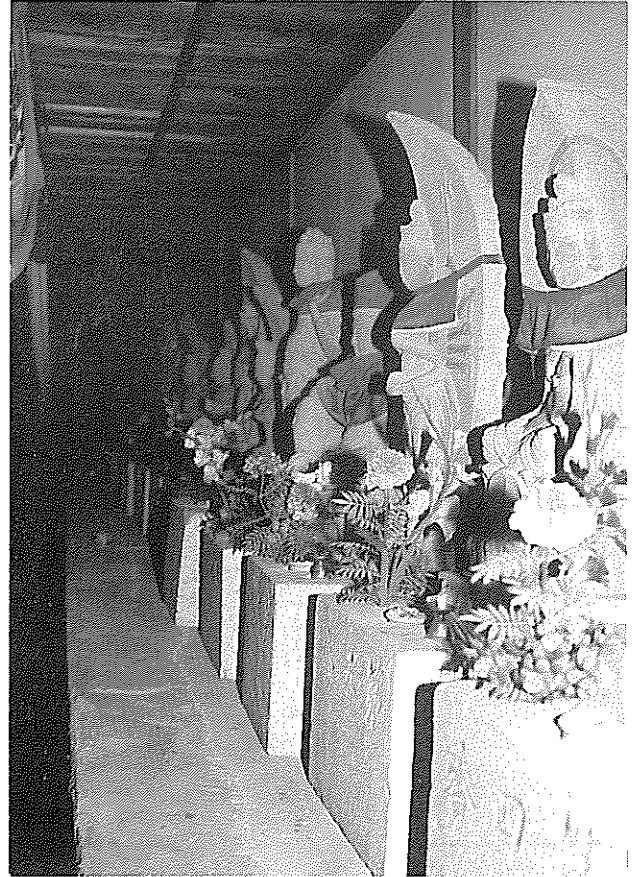
この歌は、『ふるさと日永-日永郷土史-』によると、今もなお、ご詠歌の時に「泊村光明寺のご詠歌」として唱えられているという。

光明寺は、もとは泊山の伊勢湾を一望する風光明媚な丘陵地にあったが、第二海軍燃料廠の建設に伴う関係者の住宅や燃料貯蔵所となったため、昭和16年(1941)に現在地に移転した。

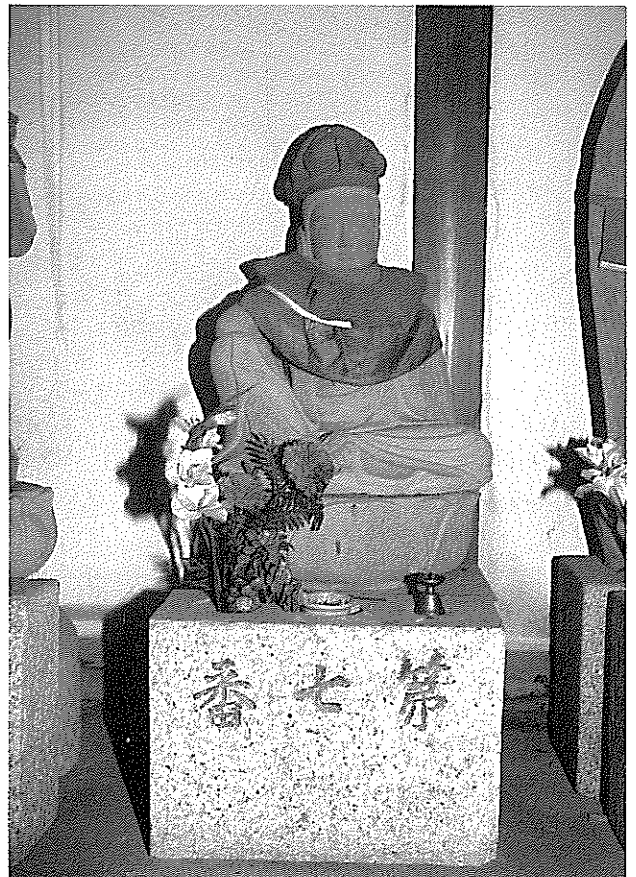
建物の配置は昔のままであるが、山門を潜ったすぐ左側に細長い観音堂の建物があり、そのなかに33体の観音石仏が安置されている。

「観音さん」いわゆる観世音菩薩は、慈悲の心をもって、三十三身にも姿を変えて、その人に合った姿で救い、迷う者を悟らせてくれる仏である。

文政5年(1822)に時の住職快融が、信者の寄進によって厩瀬が腰の山腹に33カ所の小堂を建て、33体の観音石仏を安置したのが始まりである。いわゆる西国三十三所参りをこの寺院に詣でることにより、願いが適えられ、仏の導きが得られるというもので、石仏の台石には寄進した施主の名前が刻まれている。



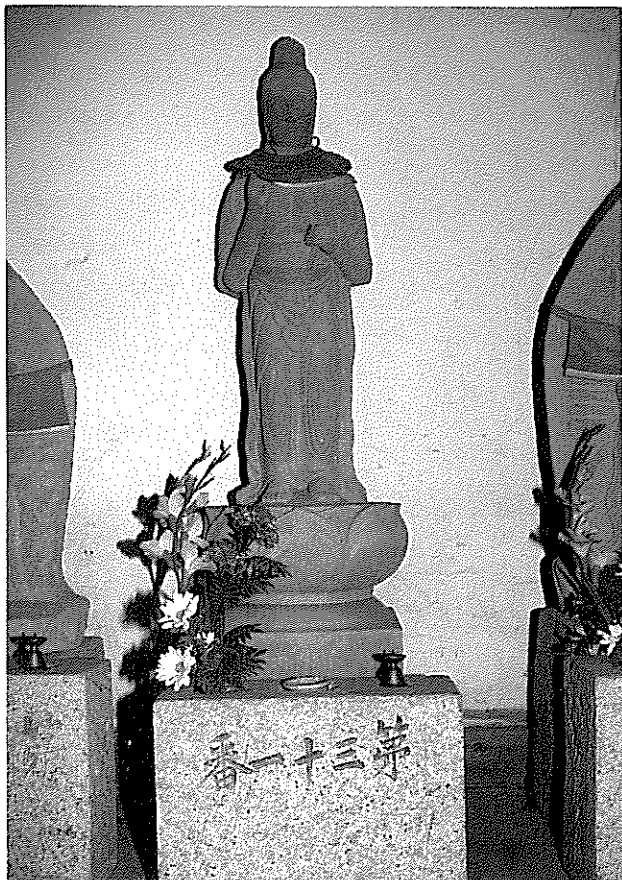
光明寺の観音堂



第七番 観世音菩薩



第十八番 観世音菩薩



第三十一番 観世音菩薩

光明寺の西国三十三所観音霊場

順番	文政5年(1822)創建の時の施主	昭和4年(1929)花台を寄進した施主
第1番	江戸榊屋見世中 泊村久歳母	四日市 絹笠清七
第2番	徳巻直玉信士 緑巻本願等英信女	神戸 清水鋼太郎
第3番	清水三右エ門	清水三右エ門
第4番	江戸赤坂田町 銭屋五兵衛 同青山久保田 伊勢屋小七 同 石川 羽生屋彦八	吉村正雄
第5番	江戸堀江町 榊屋治郎兵衛	吉村謙三郎
第6番	田中良直	清水辰蔵
第7番	在世 山形屋権治郎 文政3年6月8日 在世 山形屋権六郎 文化10年1月23日	追分 佐藤勝次郎
第8番	施主 真田津右エ門	真田捨次郎 同 やす
第9番	施主 青山源蔵	四日市 辻 芳太郎
第10番	四日市桶ノ町 田中吉右エ門	四日市 辻 かま
第11番	施主 八木長九郎	八木直次郎
第12番	施主 鈴木嘉兵衛	追分 太田浅吉
第13番	加藤甚蔵	加藤 清
第14番	十宮村 熊野伝兵衛	市橋稻吉
第15番	文政8年2月 四日市北町 森平兵衛妻幸 為実父母菩提建之	四日市 森 欽太郎
第16番	赤堀村 伊達佐七	四日市 村田吉兵衛
第17番	六左エ門 清八 式助	堀 六太郎
第18番	文政6年3月 生川吉右エ門秀房	京都市 小林捨松 小林みつ
第19番	広方治助 村山勘七 桜井重兵衛 内田半六 萩野庄九郎 葛孫左エ門 後藤伊兵衛	若松 長谷川はま
第20番	式井源四郎 同 源蔵	十八代 式井由松
第21番	江戸田所町 井筒屋庄兵衛	井筒屋 式井三十郎
第22番	江戸堀留町 花沢小四郎	長谷川峯吉
第23番	江戸 伊勢屋長三郎 三河屋吉兵衛	加藤捨次郎
第24番	素光妙意禪定尼 式井十兵衛母	丸屋 中島末次郎
第25番	施主 追分中	四日市 堀本長太郎
第26番	江戸 伊勢屋八良兵衛 同 小七内	船本松次郎 同 ふじ
第27番		四日市 伊藤まさ
第28番	真田久治郎	真田弥蔵
第29番	稲垣宇兵衛 村田藤蔵 秋山林左エ門 油問屋中 堀本茂右エ門 徳三郎 清八	稲垣伊兵衛
第30番	施主 相原庄右エ門	相原熊太郎
第31番	文政5年3月 世話人 四日市北条町 弥兵衛外七人	四日市 市橋むら
第32番	施主 荒木久兵衛	辻 藤松
第33番	施主 加藤清太夫	加藤利三

庚申塔

大聖院の庚申さん

日永地区・日永西二丁目

庚申とは、十干（甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸）の庚と十二支（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）の申とが結びついた、60回に一度廻ってくる日や年のことである。

この十干と十二支を組み合わせて、日時や時刻、あるいは方角や順番などを決めたりしたものである。

申子 乙丑 丙寅 丁卯 戊辰 巳巳 庚午……

というように組み合わせていくと、やっと57番目にして「庚申」がくる。この1回目の庚申から60番目でないと次の庚申は廻って来ないことになり、1年には6回だけということになる。

この60日に1度しか廻って来ない庚申の日に、その夜を眠らずに過ごす、守庚申とか庚申待という健康長寿を願う信仰がある。

これは、人の身中であって、人を短命にする「三尸」を除去して長生きを願うという、中国の道教の思想によるもので、身を慎み、眠らずに一夜を送ることを7回続ければ、三尸は長絶すると説いている。

庚申塔は、「庚申」「庚申供養」「奉供養庚申」など、庚申を主体とした銘文を彫ったものと、「青面金剛」「大青面金剛」「青面金剛尊」など、青面金剛を文字で表わした文字塔と、圧倒的に多い青面金剛菩薩像を刻んだ刻像塔の二つに大別される。

大聖院の庚申堂には、青面金剛の像が刻まれ、石塔には、「庚申 享保十六辛亥 五月吉祥日 奉建」「明和元 甲申年 閏十二月 大瀬古中」「庚申 元文五庚申十二月 四丁目講中」と銘文がある。

また、日永西三丁目の天白川に架かる天白橋の南詰を西へ約50m行くと、「奉供養庚申 勢州三重郡日永村 中瀬古講中十二人」と刻まれた文字塔の小さな堂がある。



大聖院の庚申さん



「奉供養庚申」の文字塔



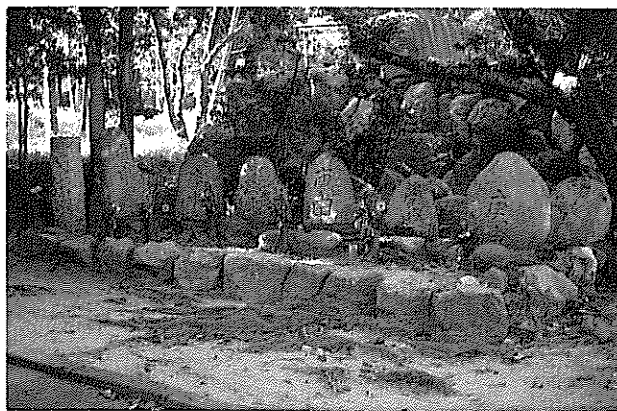
堂ヶ山の庚申さん



河原田の庚申さん



貝塚の庚申供養塔



小古曾の庚申さん

堂ヶ山の庚申さん 小山田地区 堂ヶ山町

本市指定天然記念物の大樟で有名な神明社の北側の道を進み、丘陵のなかを少し行くと、「庚申」と刻まれた細長い石が倒れているのが目にとまる。

一般に「いぼの神さん」と呼ばれ、今でも地元の人たちだけでなく、遠くからも願をかけにこられるという。

いぼ取りをお願いした時には、この庚申さんを倒しておき、いぼが取れた時には、立て直して赤飯などのお供えをし、お礼をするというものである。

河原田の庚申さん 河原田地区 河原田町

「内部川の常夜燈」の脇に、庚申塔・役の行者像・山の神が祀られている。ここから小川に沿って、南へ堤を歩いて行くと、河原田神社の参道に出る。

この河原田神社には、合祀された山の神が4基境内にあり、さらに参道から南の小川の堤には、庚申塔8基が一行に並べて建てられてある。

そのうちの6基は自然石、1基は整形して庚申の文字を刻み、もう1基は背面金剛像を浮彫りにしている。

貝塚の庚申供養塔 河原田地区 貝塚町

一般国道23号の貝塚町交差点で県道楠河原田線を東側に進み、本郷橋の手前を左折して鈴鹿川の堤防を少し行くと、庚申塔と山神塔が見えてくる。

庚申塔は、「大青面金剛」の文字を刻んだ供養塔であり、よく花が供えられている。

また、山の神の前では、12月7日の早朝に町の人びとが集まり、どんどこが焼かれ、無病息災・家内安全・五穀豊穡を祈り、お供えの赤飯をいただくという。

小古曾の庚申さん 内部地区 小古曾二丁目

小古曾町の庚申塔は、今は小許曾神社境内の首切り地藏の横に、6基の文字塔が並び、祀られている。

そのうちの2基は、「庚申」のみであるが、あとの4基には、「庚申 安永四乙未歳 十二月十七日」「庚申 寛政九巳年」「庚申 文化九申正月吉日」「庚申 明治二巳年」の銘文が刻まれており、一番古いものは安永4年(1775)で、今からちょうど220年前に建てられていたことがわかる。

山 神 塔

桜地区の山の神

椿岸神社 その他

昔から農村では、「春になると、山から里に下って田の神となる山の神は、豊穰をもたらす農耕の神であり、秋の収穫が終わると、再び山に戻って山の神になる」と信じられ、田の神や山の神に変わる2月と10月の日に山の神の祭りを行うところが多かった。

山の神には、石祠や石像もあるが、一般的には自然石に「山神」「大山祇命」などと刻んだものが多く、なかには無銘のものもみられる。

桜地区の山の神を調査研究した貴重な郷土誌が、桜郷土史研究会から刊行されている。

その冊子『山の神と村の年中行事』（昭和59年5月20日刊行）によると、桜地区における山の神の祭りは、合祀後は旧暦の10月にあたる12月上旬に、山の神宮を中心とした行事として行われた。

一般に山の神の祭神は「大山祇命」とするのが普通であるが、字斧研・山上垣内・西の平の3カ所では「八衢比古命・八衢比売命」の二神であり、これはこの二神が悪疫退散の神であることから、村の重要な一角に祀ったのではないかと考えられている。

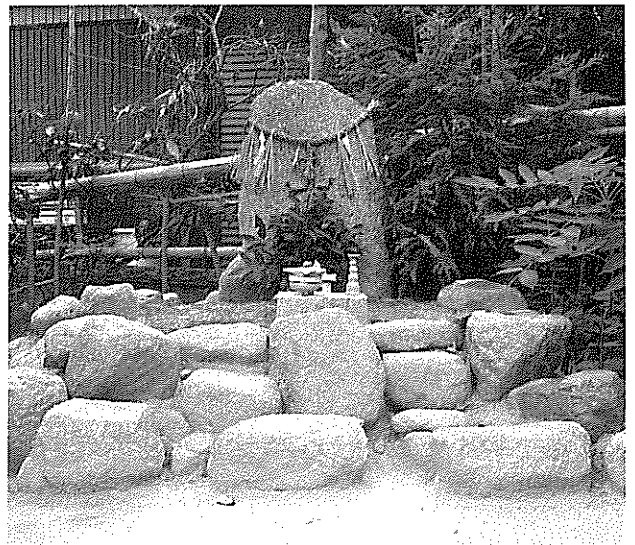
山の神の当日は、宿の床間に「山神」あるいは「八衢比古命・八衢比売命」と書かれた掛軸が飾られ、お神酒や鏡餅が供えられて、夜の更けるまで会食と歓談が続いたという。

こうした伝統的な行事も、次第に姿を消してしまっただが、今でも12月の第1日曜日に、この山の神を続けている組があり、昔ながらの風習を受け継いでいる。

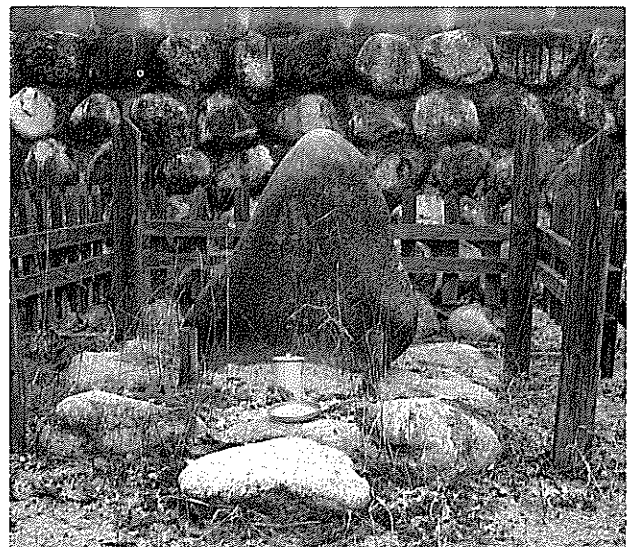
山の神のほとんどは、村里や山（丘陵）の入口付近の通り道の傍に祀られていたが、明治42年（1909）に椿岸神社に合祀され、それぞれの石塔も現在のところに移されていったようである。



椿岸神社の山の神



桜観音堂の山の神



乾谷の山の神



別所谷の山の神



遠保神社の山の神



刑部神社の山の神



愛宕神社の祠

別所谷の山の神 川島地区 川島町

川島地区郷土史研究会編集の『川島地区全図てくてくまっぷ』(平成7年6月30日再作製)によると、川島地区には、川島神社・乱飛神社・別所谷の3ヵ所に山の神がある。

そのうちのひとつ、別所谷の山の神は、字東尾の集落を越えて字中尾に至る道の北側、「杉の木の下」(このあたりは一面杉林)にあり、「水ぼうそうによく効く」と記されている。

遠保神社の山の神 三重地区 山之色町

遠保神社の本殿の南側に、1基の小さな山の神が祀られている。もとは、遠保神社の南側の三叉路に祀られていたが、この三叉路はなくなり、現在は市立三重北小学校の校庭の一部となっている。

12月8日は、この遠保神社の亥の子で、朝から人びとは米・大根・野菜などを持ち寄り、神に供えて祭礼を行う。以前はもとの場所でドンドが焚かれ、子供たちが、「ドンドの竹くれんか」とふれ廻ったそうである。

刑部神社の山の神 三重地区 東坂部町

刑部神社の本殿の東側、大木との間に3基の山の神が並んで建てられている。

明治40年(1907)9月26日に刑部神社に合祀されたが、それまでは、大字東坂部字上条・大字東坂部字城・大字東坂部字久久見にあった。

刑部神社は、明治41年(1908)4月20日に江田神社と合祀されたが、昭和5年(1930)に分社、山の神は江田神社から再び刑部神社に移され、現在に至っている。

素朴で身近な山の神

素朴な農民の信仰する山の神は、親しみのもてる身近な神であったが、市域内にどれくらい所在したのか。

時代はともかく、ここに紹介した以外にも数多くの山の神があちこちにある。

そのほとんどは、自然石に「山神」と刻んだものであるが、なかには水沢野田町の愛宕神社、あるいは高角町の高角神田天白神社のような祠に祀られた山の神もあり、かつて盛んであった信仰のあとを偲ばせてくれる。

山之色の名号塔

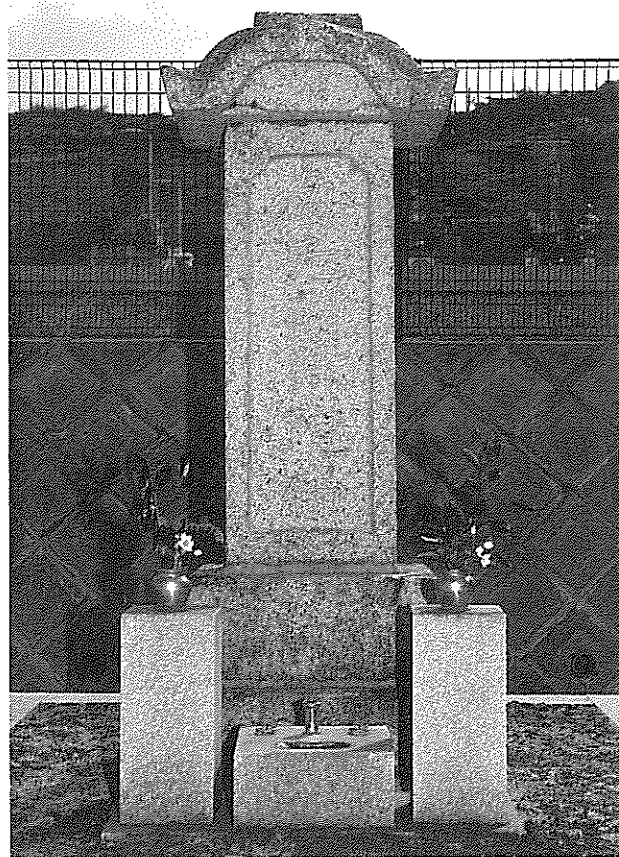
三重地区・山之色町

「阿弥陀仏に帰命する」という意味である「南無阿弥陀仏」を名号または六字名号と呼び、この名号を刻んだ塔を名号塔といっている。

名号塔には、四字の「阿弥陀仏」、六字の「南無阿弥陀仏」、九字の「南無不可思議光如来」、十字の「帰命尽十万无量光如来」などがある。ただ、一般的に名号という場合は六字名号のことをいい、これがもっとも多いといわれている。

遠保神社の東南周辺は、工業団地造成や区画整理事業などによって、その景観は一変してしましたが、この神社の北側に、平成4年7月に改葬整備された山之色町墓地がある。

この墓地の正面右側に他の墓石よりもひとときわ大きい六字の「南無阿弥陀仏」と正面に刻んだ明和8年(1771)3月の名号塔が建てられている。



山之色の名号塔

大乘妙典供養塔

羽津地区・羽津山町

正法寺の山門の右脇に「駄都者奉供養大乘妙典六十六部」と刻まれた、比較的大きな嘉永6年(1853)の供養塔がある。

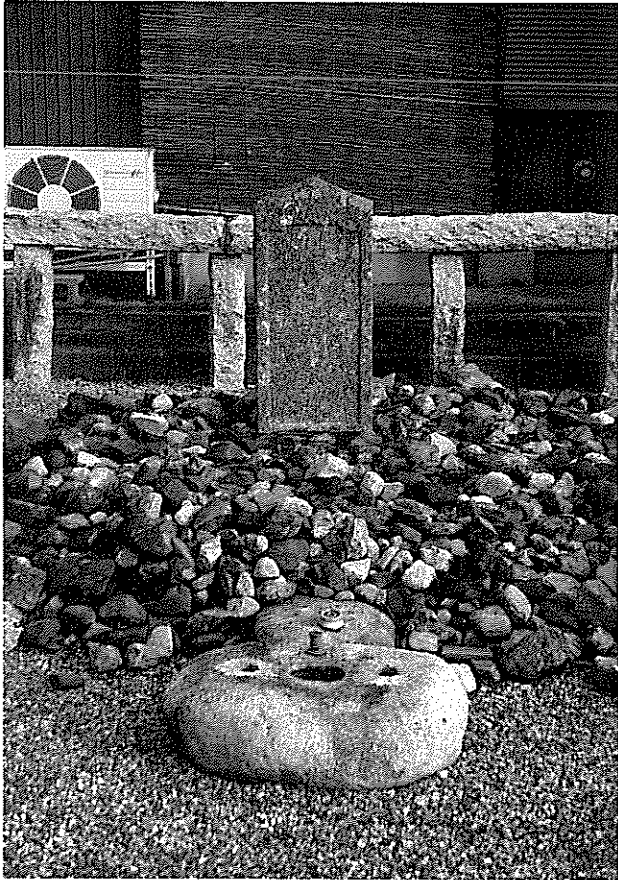
大乘妙典、つまり法華経を六十六部書写し、これを全国の国ごと、六十六ヶ国の代表的な社寺1ヶ所に一部ずつ納めることを六十六部廻国供養といい、この経典を納めて歩く者を俗に六十六部、略して六部と呼んでいた。

こうした廻国供養塔は、塔そのものは一定化していないといわれるが全国各地に広く分布し、なかには廻国の途中で亡くなった行者をその土地の人びとが弔った「六十六部供養塔」もあるという。

なお、塔身が六角形と塔型は異なるが、一面に「大乘妙典供養塔」と刻まれた嘉永4年(1851)の供養塔が、四日市市河原田地区市民センターの北側の北河原田町公会所にある。



大乘妙典供養塔



保々の首塚



瑞光の石塔

保々の首塚

保々地区・市場町

近畿日本鉄道名古屋線の霞ヶ浦駅と富田駅のほぼ中間、線路に接した東側に、茂福城跡の一部が遺っている。

茂福城は、平 維茂の子孫である貞冬が、応永年間(1394～1428)に築城、茂福氏と称したという。この貞冬が一般に盈盛(茂盛)といわれているが、その後3代を経た盈豊(茂豊)は、永禄10年(1567)9月に瀧川一益によって長鳴城に誘われて非業の最期を遂げ、その際に従臣53名も抗しきれずに自刃して果てた。

この時、重臣小川勘左衛門宗晴が主君の首を奪い返し、朝倉氏の菩提寺である大樹寺の寺域内に葬った。

“保々の首塚”と呼ばれる盈豊の墓は、今日までは寺域外となっけてしまひ、山門より南側の小牧市民会館の前に所在している。なお、大樹寺には盈豊の位牌がある。

(表) 圓寂満叟喜圓大居士 (裏) 永禄十年卯九月二日

俗称 茂福掃部輔盈豊

瑞光の石塔

桜地区・桜町

桜町の一色から湯の山街道に向けて、近畿日本鉄道湯の山線のガードを抜けると、すぐ左側に1基の石塔があるのに気付く。

ここは昔、金溪川の氾濫による土砂の堆積で、少し小高くなっていたところである。“瑞光”というこの石塔は、もともとここにあったとも、川岸に建てられていたのが洪水でここへ流れてきたともいわれている。

地元の古老の話によると、昔この近くで臨済宗の尼僧が苦行して入定されたが、場所が悪かったので、現在の石塔のあるところに移ってみると、朝・昼・晩に鈴の音が、「ちりーん、ちりーん」と聞こえたという。

やがて懇ろに法要を行い、「瑞光庵主大兄位」という諡をして供養塔を建てたのが、この石塔であると言い伝えられている。石塔の表面が風化しており、刻まれている文字は明らかではないが、「瑞光庵主」であろうか。

太夫の墓

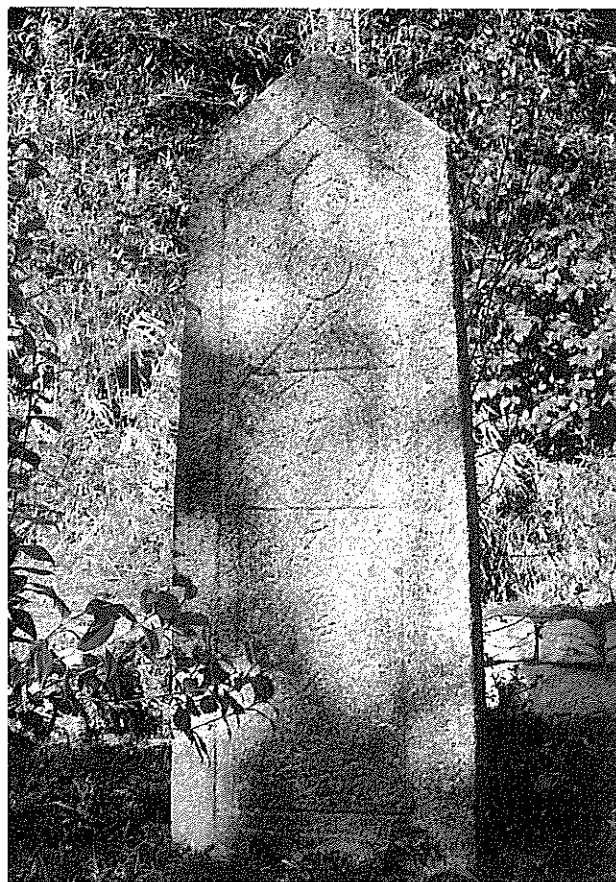
下野地区・西大鐘町

昔の新濃州街道（員弁街道）、今の県道員弁四日市線の大鐘坂にさしかかるところに、「太夫の墓」という板碑状の石造物がある。

頂部が尖頭形で、表面に五輪塔の形を線刻してあり、上から順に、空輪に 𠄎 (キヤ)、風輪に 𠄎 (カ)、火輪に 𠄎 (ラ)、水輪に 𠄎 (バ)、地輪に 𠄎 (ア) の五輪塔四方の（東）発心門の梵字を配し、地輪の梵字の下には「為度會定時 居士」、その石に享和年間ともいわれる年号、その左に「十月十五日」と刻まれている。

このあたりは、中世より下野三郷と呼ばれる岩田御薮（下野御厨）という神宮領となっていたところから、度會定時は、神宮に奉仕する外宮の神人・御師職にあった人物と思われる。

この碑は、不祥事を起こし、不本意な死を遂げた度會定時のために建てられた供養塔であるといわれている。



太夫の墓

忠右衛門碑

下野地区・西大鐘町

西大鐘村で村役を務めていた野呂忠右衛門は、慶応年間（1865～1868）のある年に、不作と重税を理由に代官所に年貢の免除を願い出していた。

ある日、村中総出で員弁・朝明両郡の郡境を設けるために溝を掘り、そのなかで枯れ草や木を焼いて灰の境界線を作っていたところ、煙が高く上がり、代官所が一揆のろしと勘違いし、忠右衛門がその首謀者として捕らわれ、牢に入れられた。

村人は、忠右衛門が打首になると心配していたが、打首は免れ、懲役となったが、これも明治の新時代を迎えて罪は取り消されて解き放されたという。

「南無阿弥陀佛」と縦に、そしてその下に「野呂忠右衛門墓」と横に刻まれたこの碑は、忠右衛門の死後、村のために働いた故人の功労を偲び、村人や親類縁者が建てたもので、西大鐘町の東端にある。



忠右衛門碑



薩摩藩士の墓



忍藩士と家族の墓

薩摩藩士の墓

大矢知地区・蒔田二丁目

文治年間（1185～1190）に、蒔田相模守宗勝が居城したという蒔田城は、今の長明寺であるといわれている。

この長明寺の境内の墓地に、年齢が親子ほど違う2人の薩摩藩士の墓がある。

『朝明殿長明寺誌』（昭和11年4月10日刊行）には、「◇薩摩藩士墓 元文三年八月十日刺違切腹 郡山茂左衛門五十四歳 箕田彦十郎二十三歳」、また、郷土栗『摩伊多の鐘』（昭和55年10月刊行）には、「薩摩藩士墓郡山茂左衛門五四歳 箕田彦十郎二三歳 元文三年八月一〇日（一七三八）刺違切腹」とある。

言い伝えによると、藩の使命を受けてきたらしい武士が、松寺橋のたもとの茶店のあたりで、刺し違えて自害したといわれている。

年代的には、宝暦4年（1754）2月からの宝暦治水平工事の開始よりも、16年も早いことがわかる。

忍藩士と家族の墓

大矢知地区・大矢知町

三岐鉄道大矢知駅から南へ進むと、市立大矢知興譲小学校に行き着くが、ここが忍藩士の陣屋（代官所）が置かれていたところである。

大矢知は、慶長5年（1600）以来、桑名藩に属していたが、文政6年（1823）に藩主松平忠堯の転封により、武蔵国忍藩の領地となった。

陣屋の一角にあった興譲館は、陣屋の武士の子弟の学問所で、明治3年（1870）には興譲堂が開設され、大賀賢励・瀬木新左衛門・丹波修治などが教鞭をとっている。

“大矢知の道標”から少し東南の真西寺には、当時、陣屋勤めの忍藩士とその家族の墓が40数基あり、年代的には、文政8年（1825）以降、天保年間（1830～1844）のものが多い。いずれも楯型と角柱型の墓塔であるが、一番古いのは、「惠譽旭山智照大姉 文政八乙酉年三月廿日卒 里見内蔵之丞正聲俊妻 すみ墓」である。

水戸藩士の墓

日永地区・泊山崎町

(もとは中部地区・栄町)

欧米列国に夢を追い、我が国が近代的を急いだ明治の時代。その近代国家への転換期に起こり、日本史上にその名をとどめる明治維新に、「偽官軍事件」という四日市を舞台とした幕末の悲話がある。

薩長の討幕軍と旧幕府軍の鳥羽・伏見の戦いは、討幕軍の実力行使となり、官軍が江戸への進撃を開始したが、そのうち“赤報隊”の一隊が桑名で争いに巻き込まれ、数人が三滝川の川原で処刑されている。

この処刑者に、綿引富蔵・小室左門という水戸藩士2人の名があり、この地に葬られた。綿引富蔵29歳、小室左門26歳の明治元年（1868）1月27日のことである。

今、その2人の墓碑が泊山崎町の泊山墓地公園のなかにあり、「水戸藩士」と姓名などが刻まれているが、銘文によると、明治30年頃に子孫が旧市街地のある寺院に建立したものであることがわかる。

蒔田相模守宗勝の墓

大矢知地区・西富田町

文治3年（1187）に富田庄六カ村は、工藤左衛門尉祐経の領地となったが、西富田、蒔田は御白河法皇の院領のため、伊勢国守護代蒔田相模守宗勝によって治められていた。

『増補富田をさぐる』（昭和60年4月1日刊行）によると、「後年、宗勝は仏門に入る。従五位下藤原宗勝朝臣入道正了房と称す。建久元年（1190）2月15日真言宗『宗勝院』を創建し、三光寺の開基となる。建暦2年（1212）正月15日宗勝は法名を祐善坊と改め見真大師の弟子となる。承久3年（1221）3月16日寂、現三光寺の地に埋葬された。」とある。

蒔田相模守宗勝の墓は、不審火によって焼失し、昭和47年（1972）に鉄筋コンクリート造で再建された本堂の南側にみえるが、これは天保6年（1835）3月に、時の住職蒔田慈雲によって建てられたものである。



水戸藩士の墓



蒔田相模守宗勝の墓



高槻五兵衛光督の墓



初代伊勢ヶ濱荻右衛門の墓

高槻五兵衛光督の墓

三重地区・小杉町

小杉町共同墓地に、「居易軒心嶺宗保居士」と刻まれた、菰野藩年寄役（家老職）高槻五兵衛光督の小さな墓がある。

五兵衛は、第7代藩主土方雄年の後見役として藩の政治を仕されていた。しかし、明和7年（1770）に財政の破綻からその責任を問われ、五兵衛は蟄居、賄方奉行の藤牧又兵衛門・森 新右衛門らに追放の責を負った。

五兵衛は、家を次郎兵衛高道に譲り、当時、小杉村の持光寺に嫁いでいた娘のところへ身を寄せていたが、隠遁生活を過ごすこと19年、73歳で亡くなり、その亡骸は娘が葬ったといわれている。

高槻家の菩提寺は、現在の三重郡菰野町大字菰野の正眼寺で、歴代の墓塔が幾つも並んでいる。ただ、おそらくは、蟄居の身をはばかったためか、五兵衛の墓はなく、過去帳にその名を記すだけである。

初代伊勢ヶ濱荻右衛門の墓

水沢地区・水沢茶屋町

県道日永宮妻線の青木川橋の北に、伊勢ヶ濱荻右衛門の墓碑がある。

江戸時代後期の相撲界で、その名を知られた初代伊勢ヶ濱関は、『すいざわの史跡』によると、宝暦13年（1763）2月3日、水沢茶屋町に生まれた。『長島町誌』（昭和53年11月3日刊行）では、宝暦7年（1757）に桑名郡長島町横満蔵の森 磯七の三男として出生したとある。以下、両誌の年代の記述が異なるが、小野川喜平治の弟子となって鎌ヶ岳兵治と名乗った。

その後、番付が上がって西三段目十枚で名を鳥羽海勘五郎に、東二段目五枚で伊勢ヶ濱荻右衛門と改名した。

そして、相撲の技量と力量に優れた荻右衛門も寄る年波には勝てず、寛政8年（1796）に東幕内四枚目を最後に、翌9年の春41歳で土俵生活を引退、文政4年（1821）あるいは同9年（1826）に歿したといわれている。

初代桂 文治の墓

日永地区・泊山崎地区
(もとは橋北地区・川原町)

落語界の名門、桂一門の始祖で、「ちはやふる」「崇徳院」などの古典落語の作者ともいわれる初代桂 文治(1774～1816)が、亡くなってから今年でちょうど180年になる。

『きらくー落語の資料ー』(平成3年11月29日刊行)によると、初代桂 文治が四日市で客死したことは古くから言い伝えられてきたが、昭和54年(1979)3月に尾崎勝也氏によって仏性院墓地でその墓碑が発見された。

仏性院は川原町にある寺院で、墓地だけが昭和30年代前半に現在の場所に移転したが、初代桂 文治の墓碑には「文化十三年十一月二十九日」と刻まれており、これまでの没年の通説「文化12年」を覆し、落語史研究にとっても非常に意義ある発見であったといわれている。

四日市は、東海道の宿場町として賑わったところであり、初代桂 文治も旅興行で訪れたのであろうか。

山田雪残の墓

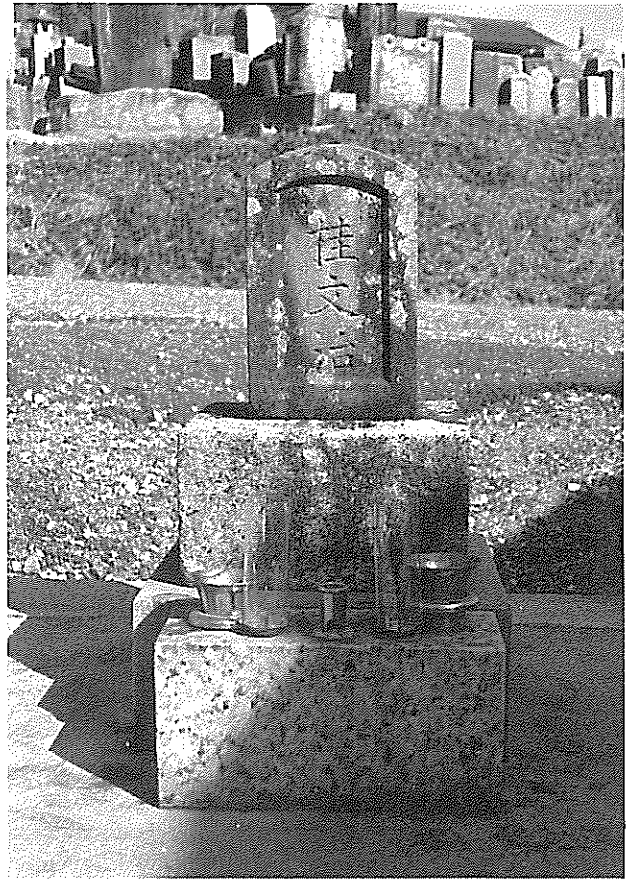
泉地区・平尾町

北勢地方の漢詩人の多くの作品を収めた『日本詩選』が、江戸時代中期の儒学者江村北海の編・選者によって刊行されたのは、安永3年(1774)のことである。そして、5年後の安永8年(1779)には、藤 世賢こと久保三水や源 義楨の作品を収めた『日本詩選続編』が刊行された。

義楨は、姓を源とも山田とも使っているところから、その出身は、山田房勝の四男で、のちに津藤堂藩校有造館の初代督学となる津坂東陽の祖山田雪残(房義)か、その兄雪岸に繋がるともいわれている人物である。

雪残は、かつての出身地、近江国神崎郡山上庄山田から山田姓を名乗り、学問、書を好み、医者となった房勝の義父で、明和4年(1767)に78歳で病没した。

なお、雪岸は、源姓を名乗る小倉家の本家を継いで、福泉寺住職となっている。



初代桂 文治の墓



山田雪残の墓



田代随意の墓



丹波修治の墓

田代随意の墓

富洲原地区・天ヶ須賀四丁目

江戸時代末期に天ヶ須賀村で、無鉄砲なところから名付けられた鉄砲医者の一りに、田代随意という人物がいた。

『富洲原小学校百周年記念誌』(昭和51年11月1日刊行)によると、随意は若い頃は尾張国の滄浪秦翁塾で学び、のちに大坂の華岡中州について外科の医術を身に付けた名医であり、天保7年(1836)には帯刀を許され、桑名藩の御殿医となっている。

学問や風流の道にも優れた人並みはずれた大男で、片手に酒、片手に書物といった豪放な人柄は多くの友をつくり、また、金銭に執着せず、天保の飢饉では私財を投げ出して難民を救ったと語り継がれている。

随意の墓は、天ヶ須賀の墓地にあり、墓碑の正面には「天洲田代君墓」、側面には詩が刻まれている。天洲とは、天ヶ須賀の地名からとった随意の号である。

丹波修治の墓

八郷地区・広永町

丹波修治は、忍藩医丹波周伯の第二子で、文政11年(1828)に尾張国で生まれ、嘉永元年(1848)に伊勢国朝明郡大矢知村大字川北の医師丹波衛門の養子となり、水谷鳳水の教えを受け、本草学を修めている。

嘉永3年(1850)に代官所の年寄役となり、明治14年(1881)に至るまでさまざまな地方行政に携わっているが、教育にも関心が深く、明治5年(1872)の学制発布とともに、現在の市立大矢知興譲小学校の建設にとりかかっている。

丹波修治は、全国的にもまれな多筆家で、地方の本草学者としては他に例がないほどの編著を数多く遺しており、「川北文庫」と押印されたその著述のほとんどは幸いにも国立国会図書館に保存されている。

なお、丹波修治は、明治41年(1908)12月12日に81歳で病没し、墓は浄泉寺の北隣りにある。

久保三水・蘭所の墓

梶野地区・江村町

江戸時代後期の儒学・漢学者久保三水是、寛保2年(1742)に当時の黒田村里正(庄屋)伊藤定軒の次男として生まれ、菰野藩儒学者龍崎致斎、津藩儒員奥田三角に師事し、研鑽を深めたといわれている。

そして、若くして吉沢村の里正、のちに大里正、税官(代官役)に任ぜられ、私塾修講館を開き、多くの門弟を育てた。また、司馬江漢や木村菴葭堂など、文人たちとの交遊も盛んであった。

久保蘭所は、安永5年(1776)に三水の長男として生まれ、父に劣らぬほど勉学に励み、その跡を継いで大里正になるとともに、山田三川や広田子道など、多くの逸材を輩出している。

三水是、文化9年(1812)に71歳で、蘭所は天保9年(1838)に63歳で没し、菩提寺である蓮行寺には、門弟によって建てられた2人と三水の母の墓碑がある。



久保三水・蘭所の墓

古谷久語の寿碑

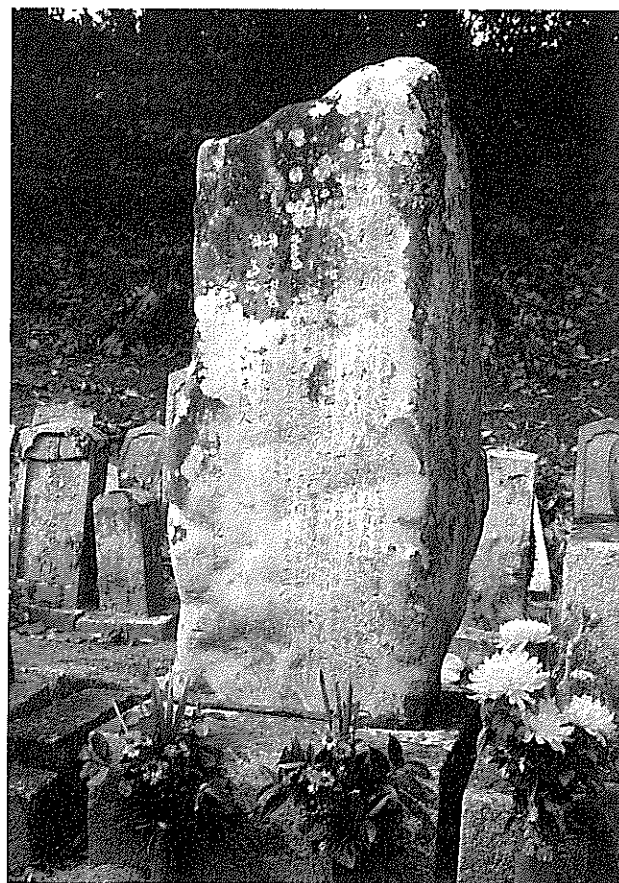
日永地区・日永二丁目

興正寺の本堂の裏側、境内の墓地のなかに古谷久語の寿碑がある。

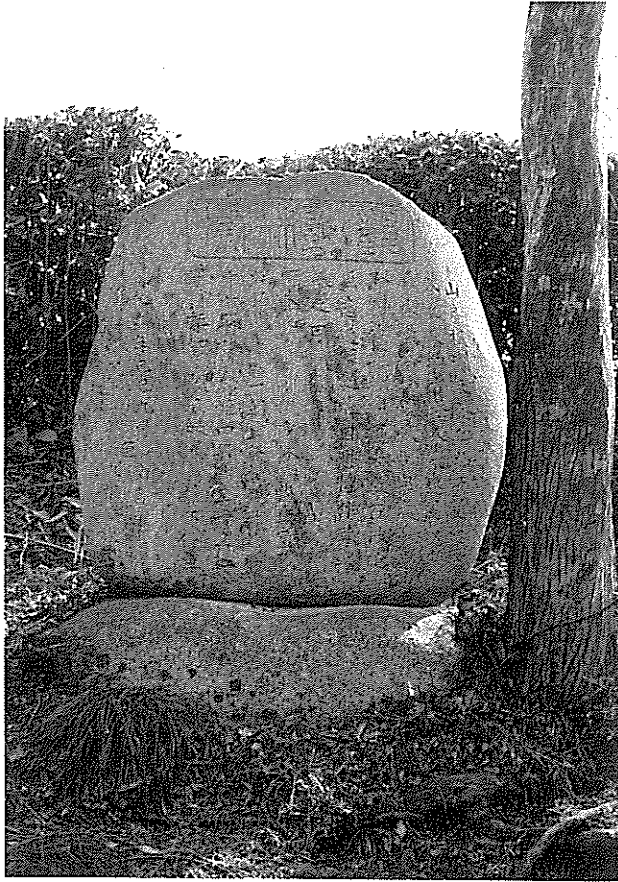
古谷久語は、現在の常磐地区・松本町の人で、名は清五郎といい、享保3年(1718)に農家に生まれ、幼少の頃から父母とともに、田や畑で汗を流していたが、本が大好きで、暇さえあれば「野史」を読み、記憶力にも優れていたといわれている。

晩年には、国史や万葉集も研究し、伊勢国の歴史や地理を知るために、国中を3回も訪ね歩き、その結果を著わしたのが、『布留屋艸紙』『伊勢名所誌』である。

その他に、『勢州雑記拾遺』『勢州街道新古考』などもあるが、久語が70歳の時に、門人らで寿碑を建てることになり、石清水長齡氏にその碑文を撰してもらい、興正寺の文廊上人によって、寛政2年(1790)9月9日に除幕の法要が営まれた。



古谷久語の寿碑



南川志道撰の観楓處碑

南川志道撰の観楓處碑

水沢地区・宮妻町

楓谷は、谷がV字状に深く切れ込み、その斜面にもみじが林をなし、谷を覆いつくすようにあり、紅葉期のさまは実にすばらしいものがある。

この“山の坊”の楓谷には、多くの文人墨客が訪れ、文芸作品を残している。また、ここは、歴代の菰野藩主がもみじ狩りを楽しんだところで、第9代藩主土方義苗が文化6年（1809）にこの地を訪れた際、そのもみじの美しさを称賛した漢詩をお供の家臣南川志道に命じて作らせている。

この漢詩を刻んだ自然石の碑が、楓谷の道路沿いにあるが、碑表の上部には横書きに「観楓處」とあり、その下に漢詩が刻まれているが、書は同じ家臣の久保 格（蘭所）の筆になるものである。

南川志道は、名を蔣山といい、天保4年（1833）に63歳で亡くなっている。



黒沢花浦の歌碑

黒沢花浦の歌碑

大矢知地区・垂坂町

歌碑は、観音寺の山門を入った本堂の左側に東向きにあり、碑面には歌が3行に刻まれている。

（碑表）とことばに我名をお比て むくういの山松
か枝も いやさかへなむ 花浦

（碑右側）安政六年

（碑左側）己未五月建之

『三重県の文学碑・北勢編』（昭和51年2月1日刊行）によると、花浦は桑名藩の歌人で、黒沢翁満、名を重礼、通称八右衛門といい、著書に『葎居集』『北勢古志』『難波職人歌合』などがある。安政6年（1859）に、65歳で亡くなっている。

なお、この観音寺の境内には、松尾芭蕉の句碑が1基本堂の前にある。

（碑表）三日月の 地はおほろなる 雪見草
はせを

松尾芭蕉の句碑

内部地区・采女町 その他

「歩行ならば 杖つき坂を 落馬かな」と松尾芭蕉が詠んだ杖衝坂は、東海道のなかでも急坂として知られていた。100m余りも続くこの急坂を見上げると、息を切らして登った往時の旅人たちの姿が浮かんでくるようである。坂の途中に当時の井戸が残っており、旅人たちはその水でのどを潤し、ほっと一息ついたことであろう。

芭蕉の句を刻んだ石碑は、宝暦6年（1756）8月に、村田触洲が建てたもので、長く個人宅にあったが、昭和51年（1976）に坂の途中の常夜燈のそばに、地元の有志の人びとによって移築された。

なお、芭蕉の句碑は、垂坂町の観音寺で昭和45年（1970）に本堂改築の際、裏山で発見された「三日月の 地はおほなる 雪見草」と、北町の建福寺の蘇鉄の植え込みのなかにある「けふばかり 人もとしよれ はつしぐれ」が知られている。

羽津の夫婦石

羽津地区・羽津町

志氏神社の一の鳥居のところには、『東海道分間延絵図』によると、「高壘間式寸、長一間五寸、横三尺八寸」の高札場が建てられていたことがわかる。

鳥居は、享保10年（1725）に作られたものであるが、その鳥居のそばに道路を挟んで比較的表面のなだらかな2個の石が安置されている。

『勢陽五鈴遺響』の「朝明郡 式内志氏神社」には、「此神社ノ地ハ、本郡三重郡ノ界ニシテ、鳥居ノ傍ニ二個ノ標石ヲ置テ、二郡ノ界ノ表トス、方俗此ニ石ヲ指テ夫婦石ト名ク」とあり、朝明郡と三重郡の境界にしていたようであるが、地元では羽津の夫婦石といわれている。

これは、当時の旅人らが通りすがりに、その石を手でなでることによって良縁に恵まれるという、縁結びと夫婦円満を祈願したもので、村人や旅人の俗信として大いに信じられていた。



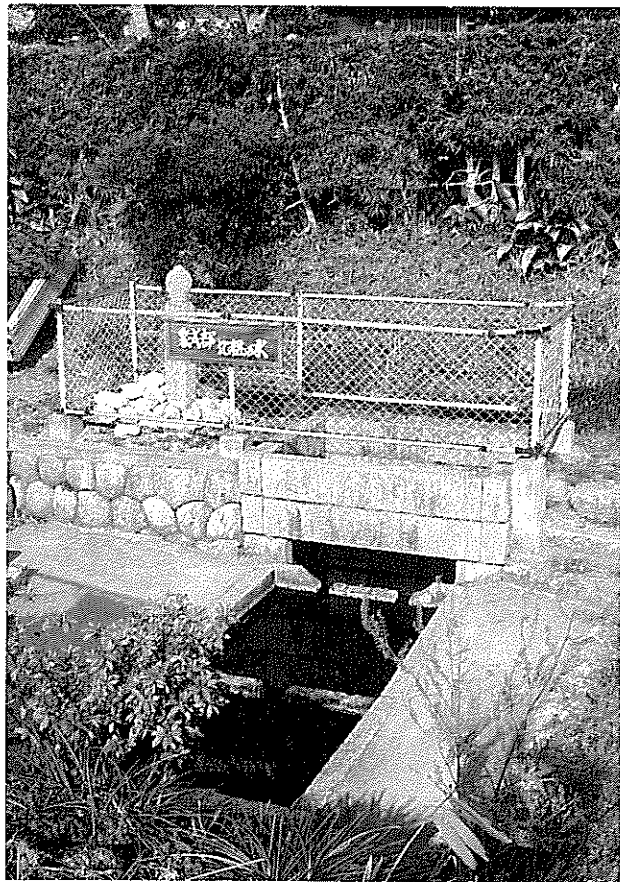
松尾芭蕉の句碑



羽津の夫婦石



生水川の引石



和泉式部化粧の水

生水川の引石

桜地区・智積町

菰野道は、四日市宿の北町の交差点で東海道と分かれ、三滝川沿いに西町・久保田・大井手・川島と過ぎ、高角橋からは生水（矢合）川沿いに進んで行く。

そして、桜へは、矢合川を渡って行くが、その入口は現在の矢合橋の上流約100mにあった石橋で、明治初期の村誌によると、「川幅・橋長ともに九間六寸、橋幅四尺八寸石造り、橋下深さ一尺」とある。

このため、僅かの増水でもあれば流れは橋を越え、足元が危うくなるので、200年ほど前に命綱を張った「引石」が兩岸に建てられた。

西勝寺の山門を入った境内に、今、そのうちのひとつがあるが、引石には「南無阿弥陀佛・願主久兵衛」という、四日市の人の名が刻まれている。

およそ18mの橋長を、張り渡した綱を手摺り代わりにして、多くの人が矢合川を往き来したことであろう。

和泉式部化粧の水

神前地区・曾井町

紫式部や清少納言ほど有名でないにしても、平安時代中期の類稀な歌人で、美人であったという和泉式部は、生没年や実名が不詳でありながらも、数多くの説話に登場し、全国各地に複数の生誕地や墓所をはじめ、さまざま伝説を残している。

この和泉式部の伝説が、『泗水 No.6』（昭和63年3月31日刊行）によると、市立図書館所蔵の古文書の写し『保曾井物語』（寛政丙辰八年）と『東光山観音寺靈泉略縁起』（天明丁未七年）のなかに見られるという。

『保曾井物語』には、「和泉式部が村にある泉で顔を洗ったところ、顔にあった痣がなくなった」という話が記されており、その泉は観音寺に至る手前の傍らにあり、「和泉式部化粧の水」の案内板がある。

和泉式部は熊野参詣の途中、ここに立ち寄り、この泉で水鏡をしたという伝説もあるといわれている。

曾井の反り橋

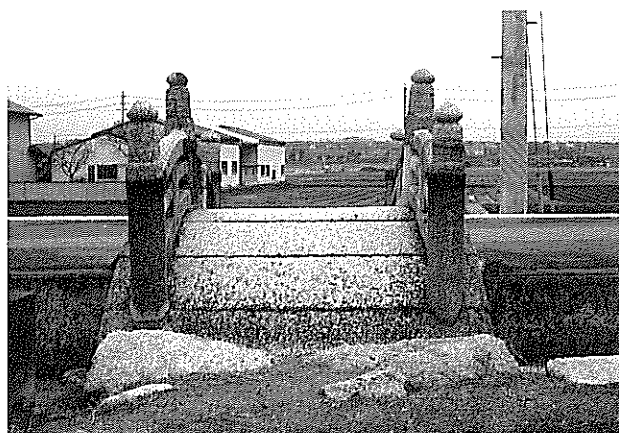
神前地区・曾井町

石橋は古くから作られてきたが、初期のものほど構造が単純で、特に銘文もなく、現在、在銘の最古の例は、京都五条大橋の橋脚だけが石造で、天正15年（1587）に造られたものであるといわれている。

全国的に広がりを見せるのは、江戸時代になってからであり、構造的にアーチ式の橋もみられるようになる。また、この江戸時代には、石橋が多く作られるのに伴って、石橋供養塔も建てられたところがある。

和泉式部化粧の水を右側に見ながら、村下川沿いにしばらく行くと、この村下川に架かる小さな石造の太鼓橋「曾井の反り橋」が見えてくる。

両側の丸石柱には、「天明六丙午年」「四月上旬造」とあり、実際に渡るとなると転びそうな、それでいてどこか愛敬のある石橋である。常夜燈と鳥居を潜り、北側へ進んで行くと、保曾井神社に至る。



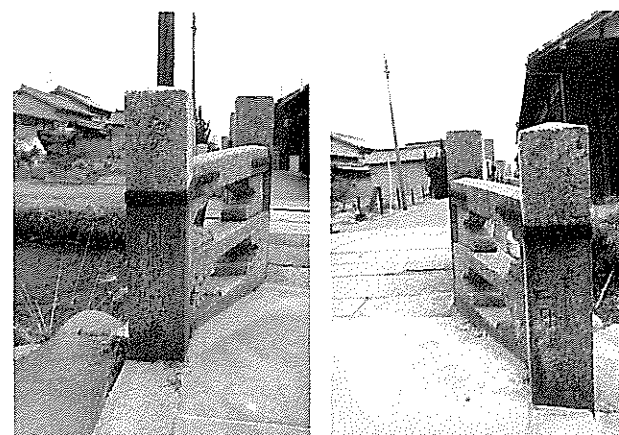
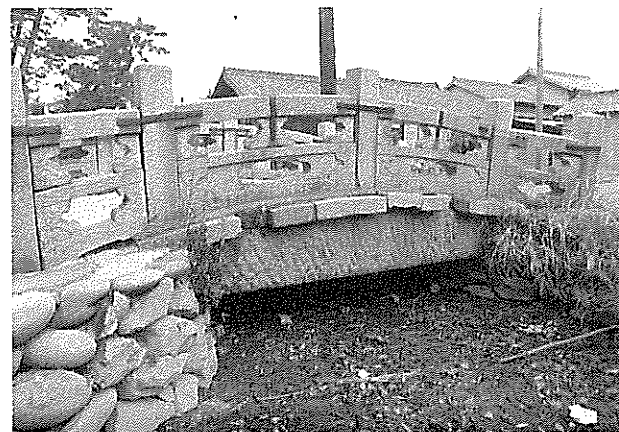
曾井の反り橋

長明寺の石橋

大矢知地区・蒔田二丁目

長明寺は、蒔田相模守宗勝が居城した蒔田城跡であるといわれ、境内は幅約5mの濠と築塀がめぐり、山門の正面入口には以前は文化3年（1806）に作られた石橋が架かり、山門を潜ると、正面中央に入母屋造りの大規模な本堂がある。

『四日市市史 第四巻史料編文化財』（平成元年3月31日刊行）によると、「すべて石造りで、上端にむくりのついた梁桁を渡し、袖付きの高欄を据えた、いわゆる太鼓張りの石橋である。高欄は石角柱を立て地覆に縦形絵様を刻み、中央を繰り抜き、架木と地覆の間にも縦形絵様を施した束を入れ、柱にも添わせる。角石柱には、「文化三丙寅二月」「桑名施主 前川藤右衛門重芳 寄進」の刻銘がある。小規模な石橋であるが、今日まで当初のままに残されているのは珍しく、築造年代も判明しており、貴重である。」と専門的用語で記されている。



以前の長明寺の石橋



明願寺の力石



茂福の力石

力石

富洲原地区・天力須賀一丁目

富田地区・茂福町

力石には二つの系統があり、ひとつは中世の豪傑など有名な人物が力試しをした石の伝説にまつわるもの、もうひとつは、村の力自慢の若者たちが祭りの余興として、持ち上げた石を神社に奉納したものである。

そして、この力石には、「切付」という石の重さや年号をはじめ、持ち上げた人の氏名などが刻まれたものもあるが、切付けのない無銘のものが多い。

本市における力石については『地域経済研究 第2号』（平成5年10月刊行）と、『四日市市史研究 第7号』（平成6年3月31日刊行）に高島慎助四日市大学教授の「三重県四日市市の力石」と題した調査報告が収録されている。

明願寺の力石は、説明板によると、「明治の中頃から大正年間にかけての頃、当時の青年娯楽は、素人相撲や力くらべなどがさかんに行われた。この力石は、当時力くらべに用いられたもので、今でいうウェイトリフティング用具の元祖ともいべきものである。当時、20歳から25歳ぐらいの若者が、神社境内などで遊びを取り入れた体力づくりに打興じたのであるが、肩まで担ぎ上げる人は何人もいなかったという。」と記されている。

茂福の力石は、説明板によると、「明治の中頃に在村の2ヵ寺の御堂を再建立する時に、土台石の奉納と御堂の地築（地固め）に近郷近在よりグループによる奉仕があった。その際に、土台石のなかよりこの石を選び、休憩時に体力を試さんとこの石を持ち揚げ、競いあった。その後、茂福地区の青年若衆が大正の終わり頃まで、この石で力くらべを競うが、肩まで担ぎ揚げた人は幾人もいなかった。この由緒ある力石を、健康長寿の石と名付けてここに保存する。」と記されている。

なお、この力石には、本市では唯一の「三十二メ」という、120kgの重さを示す切付がある。

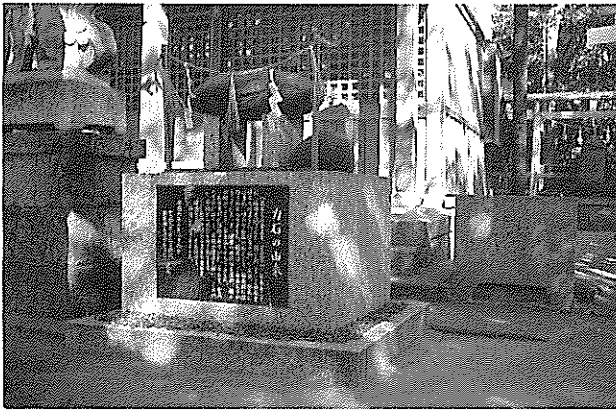
また、いずれの力石にも製作あるいは使用の年代を示す「切付」は確認されていないが、後述のように八王子町の吉田神社の力石は、寛政年間（1789～1800）、松原町の聖武天皇社の力石は、文政6年（1824）頃から用いられていたと言い伝えられているという。



穂積神社の力石

穂積神社の力石 八郷地区 広永町

由来文によると、「この力石は、旧廣永村時代より昭和初期まで、広永の若者が事ある毎に力くらべに使用していた石である。朝早くから夜遅くまで、粗食に耐え娯楽もなく当時の厳しい労働のなか、この石を中心にして、多くの人びとが語り合い、生活の潤いを求めたことであろう。先人の健康に関わる文化遺産として、皆様の健康と長寿を願い、ここに奉建された。」と記されている。

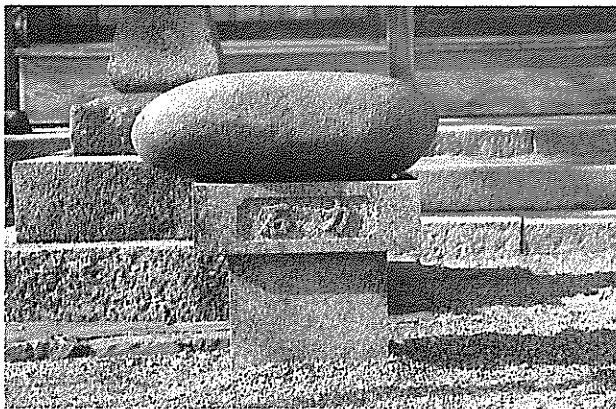


聖武天皇社の力石

聖武天皇社の力石 富洲原地区 松原町

由来文によると、「八百年もの昔より、若衆らが体力を試さんと競いあってこの石を持ち上げた。『健康の石』と呼び、祭礼に行事にゆかりの深い石として、松原村に保存されてきた。村人は、この石に触ることによって、健康への信仰を深め、種々の願い事を永年託してきた。

松原本村に保存されていた力石を、聖武天皇社に移籍、皆様の健康を願い、この地に奉納せられたものである。」と記されている。



末永神明社の力石

末永神明社の力石 海蔵地区 末永町

近畿日本鉄道名古屋線川原町駅の近く、線路に接した西側にあるこの神社は『しんめいさん』と親しみを込めて呼ばれ、昔から不思議と歯痛が治るということで、本殿の横の箱にはいつも何本もの歯ブラシが供えられ、遠方からも参拝者があったといわれている。

ここには3個の力石があり、以前は境内の地面に置かれた状態であったが、現在は本殿前の西側に、『力石』と浮彫りにした台座にひとつずつ固定されてある。



吉田神社の力石

吉田神社の力石 四郷地区 八王子町

説明板によると、「この力石は古くは寛政年間（1789～1801）の頃より、青年の力自慢に使われたもので、担いだ者が一人前の男子として認められ、力を得たという。

静かに手を触れて祈りを込め、願いをかければ魂が廻り、全身に力がみなぎって無病息災、延命に効くと伝える」と記されている。

参道の石段の右側に、『奉納 力石』と刻まれた立派な台座の上に固定して置かれてある。

垂坂の西国三十三所観音霊場

大矢知地区・垂坂町

“元三大師”の観音寺の裏山に、西国三十三所観世音菩薩霊場がある。

後藤二三郎氏の研究資料によると、昭和9年（1934）の初め頃に来村の愛知県津島市給父の三輪妙泉師の唱導・勧請によって設立されたもので、翌昭和10年1月18日に観音寺住職吉田真蓮師に依頼し、観世音菩薩石像の開眼供養を執り行ったという。

設立発起人には、五島きぬゑ・後藤やゑの・後藤和かゑ、信徒総代並びに主催者には、後藤駒治郎・後藤小一郎、参詣道路寄進者には、伊藤辰治郎、そして、観世音菩薩石像の寄進者には、地元垂坂村の17名、県外7名、その他8名の方々が名を連ねている。

昭和10年の開眼供養と歴史は新しく、参考資料として掲載したが、いずれ泊山崎町の光明寺、あるいは富田三丁目の長興寺の観音堂をはじめとする西国三十三所観世音菩薩霊場の詳細な記録化を行いたい。

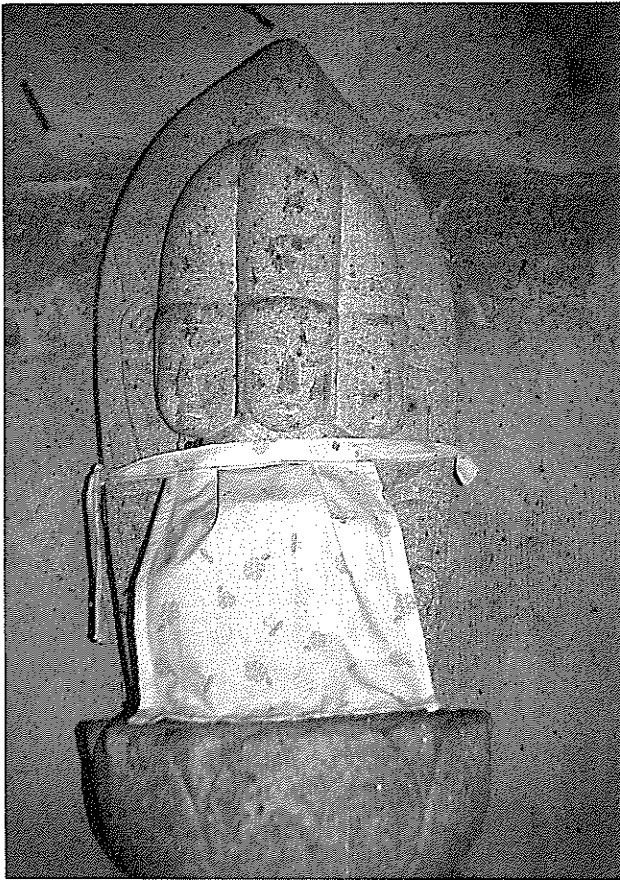
- 第一番 那智山 青岸渡寺
和歌山県東牟婁郡那智勝浦町那智山
天台宗 本尊・如意輪観世音菩薩
- 第二番 紀三井山 護国院（紀三井寺）
和歌山県和歌山市紀三井寺町
救世観音宗 本尊・十一面観世音菩薩
- 第三番 風猛山 粉河寺
和歌山県那賀郡粉河町粉河
粉河観音宗 本尊・千手千眼観世音菩薩
- 第四番 横尾山 施福寺
大阪府和泉市横尾山町
天台宗 本尊・千手千眼観世音菩薩
- 第五番 紫雲山 葛井寺
大阪府藤井寺市藤井寺
真言宗 本尊・十一面千手千眼観世音菩薩
- 第六番 壺阪山 南法華寺（壺阪寺）
奈良県高市郡高取町壺阪
真言宗 本尊・十一面千手千眼観世音菩薩
- 第七番 東光山 龍蓋寺（岡寺）



第一番 観世音菩薩



第一番の祠



第二十九番 観世音菩薩



第二十九番の祠と第三十番の祠（手前）

- 真言宗 本尊・二臂如意輪観世音菩薩
奈良県高市郡明日香村岡
- 第八番 豊山 長谷寺
奈良県桜井市初瀬
真言宗 本尊・十一面観世音菩薩
- 第九番 興福寺 南円堂
奈良県奈良市登大路
法相宗 本尊・不空罽索三目八臂観世音菩薩
- 第十番 明星山 三室戸寺
京都府宇治市菟道滋賀谷
修験宗 本尊・千手観世音菩薩
- 第十一番 深雪山 醍醐寺
京都府京都市伏見区醍醐伽藍町醍醐山
真言宗 本尊・准胝観世音菩薩
- 第十二番 岩間山 正法寺（岩間寺）
滋賀県大津市石山内畑町
真言宗 本尊・千手観世音菩薩
- 第十三番 石光山 石山寺
滋賀県大津市石山寺一丁目
真言宗 本尊・二臂如意輪観世音菩薩
- 第十四番 長等山 園城寺（三井寺）
滋賀県大津市園城寺町
天台寺門宗 本尊・如意輪観世音菩薩
- 第十五番 新那智山 観音寺
京都府京都市東山区今熊野泉涌寺山内町
真言宗 本尊・十一面観世音菩薩
- 第十六番 音羽山 清水寺
京都府京都市東山区清水一丁目
北法相宗 本尊・十一面千手千眼観世音菩薩
- 第十七番 補陀洛山 六波羅蜜寺
京都府京都市東山区松原通り大和大路東入ル
真言宗 本尊・十一面観世音菩薩
- 第十八番 紫雲山 頂法寺（六角堂）
京都府京都市中京区六角通り烏丸東入ル
天台宗 本尊・六臂如意輪観世音菩薩
- 第十九番 靈麿山 行願寺（革堂）
京都府京都市中京区寺町通り竹屋町
天台宗 本尊・千手観世音菩薩
- 第二十番 西山 善峰寺
京都府京都市西京区大原野小塩町

- 天台宗 本尊・千手千眼觀世音菩薩
- 第二十一番 菩提山 穴太寺
京都府亀岡市曾我部町
- 天台宗 本尊・聖觀世音菩薩
- 第二十二番 補陀洛山 總持寺
大阪府茨木市總持寺町
- 真言宗 本尊・十一面千手觀世音菩薩
- 第二十三番 応頂山 勝尾寺
大阪府箕面市粟生間谷
- 真言宗 本尊・十一面千手觀世音菩薩
- 第二十四番 紫雲山 中山寺
兵庫県宝塚市中山寺
- 真言宗 本尊・二臂十一面千手觀世音菩薩
- 第二十五番 御嶽山 清水寺
兵庫県加東郡社町平木
- 天台宗 本尊・十一面千手觀世音菩薩
- 第二十六番 法華山 一乗寺
兵庫県加西市坂本町
- 天台宗 本尊・聖觀世音菩薩
- 第二十七番 書写山 円教寺
兵庫県姫路市書写
- 天台宗 本尊・如意輪觀世音菩薩
- 第二十八番 成相山 成相寺
京都府宮津市成相寺
- 真言宗 本尊・聖觀世音菩薩
- 第二十九番 青葉山 松尾寺
京都府舞鶴市松尾
- 真言宗 本尊・馬頭觀世音菩薩
- 第三十番 巖金山 宝巖寺
滋賀県東浅井郡びわ町早崎（竹生島）
- 真言宗 本尊・千手千眼觀世音菩薩
- 第三十一番 姨綺耶山 長命寺
滋賀県近江八幡市長命寺町
- 天台宗 本尊・千手十一面聖觀世音三尊一體
- 第三十二番 叡山 觀音正寺
滋賀県蒲生郡安土町石寺
- 天台宗 本尊・千手千眼觀世音菩薩
- 第三十三番 谷汲山 華巖寺
岐阜県損斐郡谷汲村徳積
- 天台宗 本尊・十一面觀世音菩薩



第三十三番 觀世音菩薩



第三十三番の祠

編集後記

人びとの生活を支え、文化を育み、まちの移り変わりを静かに見守ってきた道。昔から人びとが歩き、踏みならされてきた道も、今日では車の氾濫によって道路となり、日毎に姿を変えようとしています。

そして、かつての道と同じように、路傍のそこかしこにあって、往時の面影を偲ばせてくれる歴史的な“記念物”も次々に失われて行く傾向にあります。

道行く人びとの安全を願い、その目印として設けられた道標、村人の安穏と心の統一を願い、聖なる火で暗い夜道とふるさとを照らし続けた常夜燈も、ほとんど“お役御免”になったとはいえ、道路の片端に追いやられ、肩身の狭い思いをしながらも、あるいは安住の地を求めて場所を変え、ひっそりとたたずんでいるのを見かけることがあります。

また、街角に、集落のはずれに、あるいは谷あいの里で、人びとの切なる祈りと願いをみつめてきた、さまざまな神さん、仏さんたちも都市化や地域開発などによって、同じような状況に置かれています。

こうした石造物は、いずれも長い間、その土地の人びとの連帯意識によって受け継がれてきた文化遺産であり、いわゆる「地域文化財」の代表格といっても過言ではないでしょう。

本市では、各地区においてさまざまな地域社会づくりが行われ、その一環として地区郷土史研究会による『地区郷土史』の編さん、あるいは地域文化財の説明板や標柱の設置などに取り組まれているところがあります。

次代を担う子供たちに、受け継がれてきたすばらしい地域文化財を実際に訪ね歩く、地区文化財めぐりも行われているとのことでした。

この冊子の編集では、これら貴重な『地区郷土史』はもちろんのこと、説明板なども参考・引用させていただきました。誌面の都合上、省略させていただきましたが、厚くお礼申し上げます。

なお、今後も地域文化財調査事業を継続し、内容を変えながらさまざまな文化遺産を紹介していきたいと考えています。

この冊子が、ふるさとを見直し、文化遺産や地域の歴史を考える一助となれば幸いです。 (編集子)

歴史的石造物の調査

—四日市市地域文化財調査の記録①—

平成8年3月31日

編集 事務局文化課
発行 四日市市教育委員会
印刷 大同印刷株式会社